

東日本大震災の記憶と、未来の命を守る防災活動

Memories of the Great East Japan Earthquake and Disaster Prevention Activities to Protect Future Lives

川崎 杏樹*

1. はじめに

岩手県釜石市の沿岸部に位置する津波伝承施設「いのちをつなぐ未来館」で、語り部をしている川崎と申します。釜石市は東日本大震災の津波で、大きな被害を受けた地です。その中でも「いのちをつなぐ未来館」がある鵜住居地区では、釜石市内全体での死者行方不明者の約6割を占めるほど多くの方が犠牲となりました。

私は東日本大震災当時、鵜住居地区の釜石東中学校の2年生でした。当時の校舎は大槌湾に面する場所にあり、津波は校舎の3階までやってきましたが、学校の管理下にあった生徒たちは津波から無事逃げ切ることが出来ました。生徒の命を守った要因は様々考えられますが、そのひとつは防災学習にあると考えています。震災前の東中学校では、津波の速さを再現した車との追いかっこなど、津波の威力を体感できるような授業が行われていました。また、隣接する小学校の子どもたちとの合同避難訓練など、本番のように臨機応変な対応が求められる実践的な訓練も行われていました。それらの取り組みの結果、生徒たちの率先して逃げる意識と行動力が育まれ、迅速な避難に繋がったと考えています。

この文章では私の被災体験の記憶と、釜石東中学校の防災学習の取り組み、その教訓を生かした「いのちをつなぐ未来館」での取り組みについてご紹介致します。今後の災害に備え、皆様の命を守っていく一助にして頂ければ幸いです。

また、震災から10年が経った釜石での復興の現状やそのことに対する思いについても記させて頂きました。ともに、これからの東北の未来を考えていきましょう。

2. 震災の記憶

a. 沿岸の校舎にて

2011年3月11日は卒業式を目前に控え、準備のため短縮時程でした。地震が起きた時刻は既に帰りの会を終え、放課後となっていました。当時バスケットボール部だった私は体育館で準備体操をしていました。

体育館の窓がカタカタと揺れる音で地震に気が付きました。その時は「また地震か。どうせすぐ収まる。」と思っていました。しかし、段々と揺れは大きくなっていきました。過去に経験したことのない、尋常ではない揺れに、強い驚きを感じました。次第に立ってられなくなり、その場にしゃがみこみ揺れに耐えていたのを覚えています。大きく横に揺れている間、「これが、いずれ来ると言われていた宮城県沖地震だ、絶対に津波が来る」と思いました。小学生の頃から、「30年以内に99.9%の確率で、宮城県沖地震が発生する」と教えられていたのが、頭の片隅にずっとありました。揺れがおさまりやっと動けるようになった時「すぐに逃げなければ」と思い、急いで校庭に向かいました。

周りを見ると、校舎のいたるところから生徒達が一齐に集まってきていました。生徒達は自分達の判断で校庭に集まり、点呼を取り始めていました。私も当時生徒会に所属していたため、生徒を整列させました。後に聞いたのですが、野球部員の話によると、この時校庭では地割れが起きていて、そこから水が噴き出していたそうです。

この時ほとんどの先生方は職員室にいました。地震発生直後、副校長先生が放送を使い避難を促そうとしていたのですが、地震による停電のため、放送

*株式会社かまいしDMC 語り部ガイド

が使えない状況だったそうです。先生方も半ばパニックになっているその時、職員室や放送室の窓から、生徒達が校庭に集まり点呼を取り始めている姿が見えました。その様子を見た副校長先生が「点呼は取らず、すぐに逃げる」という判断をしました。指示を受けた男性の先生が、生徒たちにもものすごい勢いで走り寄り、点呼を取り始めている生徒達にむかって、「点呼はいいから、すぐに逃げなさい」と叫びました。そして、生徒達は一齐に避難場所へ目指して走り始めました。

b. 学校～ございしょの里まで

私たちがまず向かった先は、普段の避難訓練でも使用していた「ございしょの里」という福祉施設です。私も近くにいた友達と一緒に走り始めましたが、まだおしゃべりをする余裕がありました。数分ほど走ったとき、市の防災無線が聞こえてきました。「大津波警報が発令されました。予想される津波の高さは3mです。」という内容でした。しかし、私と友達は「あんな大きな地震があって、たった3mのほががないよね」と話していました。気が付くと防災無線は止んでいました。

広くない道路だったので、生徒達は端によって、車に気を付けながら走って逃げました。海の方から車が何台も、私達を追い抜いて行きました。中学生が逃げる姿を見て避難した地域の方も多くいらっしゃいました。地震発生から約10分～15分ほどで「ございしょの里」までの避難が完了しました。

「ございしょの里」で改めて点呼を取り、当時学校にいた全員が避難していることが確認できました。待機をしている間、余震が絶えませんでした。

この時、近所のおばあさんが「すぐ後ろの山が地震によって崩れている。今までこの地域に住んでいてこれほど崩れているところを見たことがないから、とんでもないことが起きる、ここにいたら死んでしまう。」と先生に話してくれたそうです。それを聞いた先生方は、さらに高台へ逃げる判断をし、ございしょの里から300m離れている「山崎デイサービス」へ向かうことになりました。

c. ございしょの里～山崎デイサービスまで

私たちは、小学生と一緒に手をつなぎ、さらに歩いて逃げました。山崎デイサービスに到着し、小学生と中学生とに分かれて点呼を取っていたその時、ものすごい地響きのような音が聞こえてきました。大きな余震が来たと思ったのですが、様子が違いました。町の方を見てみると既に、津波が押し寄せていました。つい先ほどまで歩いていた道、通ってい

た学校、住んでいた町、すべてが津波に飲み込まれる瞬間でした。私はこの時生まれて初めて津波を見ました。頭が真っ白で、ただただ茫然としていました。町全体が土煙で覆われていて霞んで見えました。その中でも、真っ黒で大きな壁のような津波がどんどん迫ってきているようでした。

私が唯一感じたことは、「死ぬかもしれない」ということでした。津波を見た時間はきっと一瞬だったのですが、体感としてはずっと長い時間、津波に飲み込まれていく鶴住居の町の景色を見ていたように感じました。

山崎デイサービスの駐車場には、私たち中学生・小学生のほかにも、迎えに来た保護者、地域の方々、近くの保育園の方々も避難してきており、1000人近くの人がいきました。津波を見た瞬間に、この場が一気にパニック状態になりました。津波を見た直後は、その場にいたほとんどの人たちが高台を目指して走り始めました。

家が壊れていく音、津波の音、さまざまな音が聞こえてきていました。津波が来た瞬間、空気がヒヤッとしたような気がして、どこことなく、海の潮というか下水道のような匂いがしていました。そして私たちが次に目指したのは、「恋の峠」という場所です。

d. 山崎デイサービス～恋の峠まで

山崎デイサービスを出る時は、整列など一切関係なく、ひたすらに高台を目指しました。津波を見た直後だったので全力走で逃げました。私は近くにいた友達の腕をつかんで走りました。周りにいた生徒達も近くの人に手を貸したりして、支え合いながら逃げていたことを覚えています。

恋の峠まで残り200mほどになると、急な坂道がありました。普通に歩いていても辛く感じるような坂道でしたが、この時は全く疲れを感じずに走ることができました。それほど必死だったのだと思います。恋の峠の頂上に到着しても逃げることをやめず、峠のすぐ横にある山の上まで登りました。山の上からは、変わり果てた鶴住居の街並みが見えました。ついさっき見た時よりも家がさらに無くなっていて、町全体が黒い海になっていました。

私は山の上から、ただ茫然と見ることしかできませんでした。この時はまだ、家族を心配する余裕すらありませんでした。山の上に登って初めて、自分が津波から逃げ切ることができたことを実感して少しか安心しました。

少し経ったあと、下の道路から「降りてこい」という先生の声が聞こえました。生徒達は道路に集ま

り、再度点呼を取って、とりあえず生徒の無事も確認することができました。

私たちは道路の上に座り待機をしていたのですが、この時、大槌方面の空が赤く見えており、火事が起きていることが分かりました。火が燃え広がり鶴住居にも来るのではないかと不安だったのを覚えています。

e. 恋の峠～旧釜石第一中学校まで

しばらく待機したあと、釜石市の方面に移動することになりました。下町の方は津波の被害が酷く通行が困難だったため、新しく建設されたばかりの三陸道を通りました。恋の峠の石屋すぐ横の山に登って道路に上がり、そこから9キロメートル離れている「旧釜石第一中学校」を目指して歩き始めました。

すでに日が暮れており、街の明かりはすべて津波に奪われ、辺りは真っ暗で何もみえませんでした。三陸道のトンネルの明かりだけが光っていました。

この時私は部活動をしている時の恰好のままだったので、上着は持っていませんでしたが、3月の釜石では珍しく雪が降ってきました。友達と「なんでこんな時に雪ふるんだよ」と愚痴をこぼしながら歩いていたのを覚えています。

しばらく歩いていると、トラックの荷台に乗せて頂くことになりました。三陸道を歩いている生徒をたまたま見かけたようで、心優しい運転手さんが声をかけてくださったそうです。その場所から、避難所となった場所まで、ピストン輸送で生徒達を運んでくださいました。この瞬間が、当日の中でも唯一楽しい時間でした。きっと二度と、大きなトラックの荷台には乗れないだろうなどと思いながら移動していました。数分して、旧釜石第一中学校に到着しました。ぎりぎり津波の被害を免れたこの場所は避難所となっていて、既に多くの地域の方々が避難をしてくれており、人で溢れかえっていました。

f. 避難所での様子

私たち生徒は体育館に入ることになり、中学生はステージ上のスペースを借りましたが、すし詰め状態で体育座りから体制を崩すことができない程でした。足を伸ばしたくても、横になりたくても友達にぶつかってしまうほど窮屈でした。

しかも、使われていない校舎だったので、耐震性も不安でした。余震は絶えず起きていて、大きな余震が来ると今にも体育館が崩壊するのではないかと不安がありました。

私は友達と一緒に外で過ごすことにしました。季節外れの雪も降っていて、かなり冷え込んでいま

た。しかし、防寒のために配られたのは、3人くらいで使うようにと言われた新聞紙一枚だけで、とても寒さをしのげるようなものではありませんでした。外では、避難してきた人たちが3か所くらいで焚火をしていて、その火のそばで一晩過ごしました。この時不思議と眠くはならなかったのを覚えています。

翌日、早朝のうちに迎いのバスが来て、生徒達は釜石市の内陸部にある学校に避難することになりました。移動先の甲子中学校の教室を避難所として使わせてもらうことになりました。食事は、菓子パンとおにぎりとおにぎりのみで、水はほとんど届きませんでした。避難所の運営は、先生方や中学生が主に担っていました。中学生でもできることは多く、名簿作成やトイレ掃除、マッサージなどに精力的に取り組んでいました。結局私はそこで約1週間一人で生活をして、その後家族全員と再会することができました。

3. 防災学習の取り組み

a. いのちを守った防災学習

結果的に、学校管理下にいた生徒は、全員助かることができました。また、避難途中では園児を負ぶったり、地域の方々の手を引いて逃げたりと、地域を巻き込んでの避難ができました。震災前には、東中学校の生徒が、周囲に避難完了と避難先を知らせる「安否札」の制作と地域への配布を行っていました。実際にその札が家族の避難を促し、命を救ったケースもありました。

恐らくあと5分、避難が遅れていたら私は波に吞まれていたと思います。地域の方々の避難を促すことも出来なかったでしょう。避難を可能にした要因のひとつは、防災学習であったと私は考えています。防災学習を通して、津波の発生するメカニズムやその威力をよく知り、自分事化することが出来ていたので、当日も避難の必要性を感じることができました。そして、いざ津波が来た時に逃げるための実践的な訓練をしていたことで、本番でも訓練を活かした避難行動が出来たのだと思います。

b. 釜石東中学校の取り組みの背景

震災前の2009年ごろ、99.9%の確率で30年以内に大津波が発生すると言われていました。とりわけ東中学校は、海に近く川も目の前だったので津波が起きれば浸水は免れません。2009年に釜石市の防災教育事業の連携協力校になったこともあり、そのころから本格的な防災学習の取り組みが始まりまし

た。担当者の一人であった森本先生は、避難訓練の様子やアンケート結果から露わになった生徒たちの防災意識の低さに危機感を抱き、県の研修会や先進地での視察を参考に、独自の防災学習を実現してきました。

東中学校は元々防災意識が高かったわけではありません。防災学習に取り組んでいく過程で、生徒にも先生方にも徐々に防災意識が醸成されていきました。岩手県の教職員の多くは内陸出身なので、生徒よりも防災の知識や意識に乏しい先生もいました。ゆえに先生方は、一方的に教えるのではなく、生徒達と一緒に学ぶ姿勢で取り組む姿勢を生徒に見せてくれました。

c. 釜石東中学校の取り組み

防災教育の狙いは、「自分の命を自分で守る」「助けられる人から助ける人へ」「防災文化の継承・醸成」でした。そのために、津波や地域について「知る」ことと、臨機応変に「判断する」こと、本番を想定して「実践する」という三点に主眼を置き、工夫を凝らした学習を行いました。以下で具体的な取り組みを紹介します。

一つ目の「知る」ための学習では、例えば、津波の威力を具体的に想像し危機感を抱くことが出来るよう、地上での津波の速さと同じ時速36kmの車と生徒の追いかっけが行われました。津波の恐ろしさと、迅速な避難の必要性を感じることができる学習でした。

二つ目三つ目の、臨機応変に「判断」し学んだ知恵を「実践」するためには、例えば、毎年の避難訓練に様々な想定を加えながら行っていました。小学生との合同避難訓練では、ケガをして自力では逃げることができない児童を中学生がおぶって逃げるといったものや、あえて指定の場所に逃げないよう数名の生徒に指示を出し、整列の際に人数が足りないことに気づき報告することができるのかを試す取り組みもありました。

そして、どの学習においても共通して、生徒たちの主体性を引き出すために、「楽しい」と思わせる要素を取り入れていました。上記で挙げた例の他、「津波てんでんこ」の教えを伝える「てんでんこレンジャー」というオリジナル演劇を収録したDVDを作成したり、防災甲子園などのコンテストに応募したりもしていました。命を守るための学習だからこそ、形式的なもので終わるのではなく、生徒たちが楽しみながら本気で取り組みたくなるような仕掛けが散りばめられていました。

このように、本格的な防災教育は、東中学校にとって初めての試みであったにも関わらず、地域の方や防災に造詣の深い方のご意見を伺い取り入れながら、様々に工夫が凝らされて行われておりました。その結果として、生徒たちの命を守ることができたと考えています。

4. 復興について

a. 復興の現状への思い

震災から10年が経過し、当時の状況だけではなく復興について尋ねられることも増えました。普段は「復興」という枠組みで地元を見つめることはあまりないですが、時間の経過とまちの変化を感じます。特にまちの明かりが増えたことを感じる時は感慨深いです。震災直後の高校時代は街灯も無かったので、携帯電話の明かりで足元を照らしながら帰っていました。しかし今は、震災時、津波から逃げるために走って登った恋の岬から、まちの明かりが美しい夜景として見えるようになり、時の経過を感じました。

もうひとつ、子どもたちの登下校の姿が見られることが大きな変化でした。それまではスクールバスで内陸の方の学校まで通っていたのですが、学校ができて子どもたちがまちを歩く様子を見かけるようになりました。

地域の動きで言うと、個人的には地域のために活動している人がよく見えるようになったと感じます。それは恐らく、震災という共有体験が、まちを見つめ直すきっかけになったからではないかと思っています。

総じて言うと10年間はあっという間でした。震災をきっかけとして様々な経験をしたことで、感じることを考えることが様々あり、日々を一生懸命生きていたら気が付いたら10年が経っていたような感覚です。

5. いのちをつなぐ未来館での取り組み

a. 具体的な取り組み

私は高校を卒業した後、大学進学のために釜石を出て、卒業後に再び地元に戻ってきました。今は釜石市にある震災の伝承と防災学習のための施設「いのちをつなぐ未来館」で勤務しています。この施設は、かつての釜石東中学校のすぐ近くに位置しており、震災当時の様子を知っていただくだけでなく、釜石東中学校の事例から学び、未来の命を守るためのプログラムを多数開発するなど、未来を見据えた

取り組みに力を入れています。具体的には、語り部や避難道追体験のほか、防災知識を楽しく体感しながら学ぶことができる防災運動会や、釜石東中学校の生徒発案で開発された安否札制作の体験などを提供しています。また企業や教員の方に向けては、防災学習のエッセンスを抽出した組織づくりやリスクマネジメントの研修なども行っています。そして今年度からは、コロナ渦で直接お越しいただくことが難しい中でも震災の伝承と防災活動を続けていくため、オンライン語り部やオンライン防災リユック研修など、オンラインプログラムの拡充にも力を入れています。

b. 今後の展望

普段は、語り部やワークショップの司会を通して「伝える」仕事をしています。その中で、防災の大切さを知っていても、実際に行動に移している人は多くはないと感じています。しかし、防災は決して難しいこと、大変なことではありません。避難路を確認するくらいなら時間も掛かりませんし、防災用品は気軽に備えられるものも多いです。

災害が起きたら自分はどこににげるのか、その時家族はどうしているのか、避難した後はどうやって連絡をとるのか、家に帰ることができなくなったらどうするのか。「その時」をリアルに想像するほど、自分のやるべきことが見えてくるはずです。今後は、

より多くの人に備える実践まで行動してもらえるような、発信の仕方やプログラムの開発に力を入れていきたいと考えています。

災害は必ず起こります。それを防ぐことは出来ませんが、命を守ることは出来ます。私も東日本大震災を経験するまで、「いつか」津波は来るだろうけれど、それは「今」ではないと思い込んでいました。しかし、実際津波はやって来ました。「いつか」を自分事化出来なかった自分だからこそ、同じ目線で多くの人に伝えることができると考えています。今後は、「犠牲者ゼロ」を目指して、津波に限らない防災を発信する拠点を目指していきます。

著者略歴



川崎杏樹（かわさき あき）

（株）かまいし DMC の地域創生事業部のすまい・トモス運営課。岩手県釜石市鶴住居地区出身。釜石東中学校の2年生時に被災して以来、様々な場で語り部活動を行う。現在は、勤務先のかまいし DMC が管理する「いのちをつなぐ未来館」の語り部や展示のご案内の他、防災ワークショップの企画運営も担っている。